

春昼の超短編ツイッター小説

2010年8月のツイート



満員電車に乗った。乗客みんな全裸だった。スーツを着ているのは僕一人だけ。裸の男女はみんなiPadを持っている。画面にタッチして、指で何度も液晶をこすっている。彼らの顔は満足気だ。一人スーツを着ている僕は、iPodで音楽を聴きながら、車内の様子を眺めた。

エスカレーターに乗った。前を歩いているスーツ姿の女性の背中に太い剣が突き刺さっている。血は見えないが、痛そうだ。僕以外の誰も、彼女の背中に大剣が突き刺さっていることに気付いていないようだ。剣の刺さった本人さえ気付いていないで、スマートフォンで音楽を聴いている。

商談を終えてビルの外に出た。交差点の真ん中に死体が積み重なっている。背中に翼を生やした全裸の女性の死体が、交差点の真ん中に山を作っていた。あれは、天使の死体だろうか。死体の山に誰も気付いていない。僕は携帯から警察に通報せず、ツイッターでつぶやくことにした。

満員電車の中に死体を見つけた。リクルートスーツを着ている女の子が血を流して死んでいる。僕以外の誰も彼女の死に気付いていない。iPadを愛撫している人、読書している人、死んだように寝ている人、無表情の人、彼らの中にリクルートスーツの死体が埋没している。冥福を祈ろう。

仕事を終えた僕は、東京駅から電車に乗って自宅に帰ることにした。すれ違う全員が、手錠をはめている。何故だろう。携帯でニュースを見てみる。日本人全員が逮捕されたそうだ。これから全員強制収容所送りだと言う。僕は手錠をはめられていないぞ。行政の手違いだろうか。

就職面接に行ったら、面接官の背中に大剣が刺さっているのが見えた。圧迫面接担当の人含めて、全員だ。血を床にこぼしながら質問してくる。僕以外の応募者は気づいていない様子だったので、僕も普通に受け答えして面接を終えた。あの会社、社員全員に剣が刺さっているかもしれない。

大雨の日だった。交差点にスーツ姿の女性が倒れていた。背中には大剣が突き刺さっている。雨に打たれる彼女の周囲には、血の混じった水溜りができている。彼女に名前を尋ねた。彼女は「小説」と名乗った。僕は小説を助けるため、彼女の背中に刺さった大剣に手をかけた。

お釈迦様の手のひらに全裸の男が座っている。彼は股間においたiPadをひっきりなしに触っている。液晶画面にタッチして、こすって、撫でて、世界につながっていると感じている彼は、自分がお釈迦様の手のひらの上にいることを知らない。

大手町を歩いているスーツ姿の人たちの背中には、羽が生えています。彼らの羽は疲れて垂れ下がっていたり、片方が折れ曲がっていたり、羽の付け根に大剣が突き刺さっていたり、治療が必要なものばかりです。真っ黒な六枚の羽を生やした人が、皇居前を歩いていました。政治家でした。

朝の満員電車に乗る。乗客は全員豚だった。ぎゅうぎゅう詰めならぬ豚豚詰めで息苦しいというのに、豚丼一杯290円という車内広告が出ている。僕の体を押しつぶしている豚一匹の命は、290円以下なのだ（290円にはご飯や味噌汁の命も含まれている）。豚が可愛そうになってきた。

オフィスの個室が全て鳥小屋になっていた。狭い鳥小屋に鶏がぎゅうぎゅう詰めならぬ鳥鳥詰めだ。こんな狭苦しい部屋で働いて、心身に異常をきたさない方がおかしい。与えられる食事は黄色いバナナとトウモロコシばかり。僕は鶏を個室から解き放ち、ひよこと卵を抱えて青梅に逃走した。

東京駅前、商社のオフィスビルが立ち並ぶ一角に、高層ビルと同規模の大剣が突き刺さっている。大剣は何名もの人間を串刺しにしている。剣の根元には血だまりが広がっている。僕たちは裂傷を負いながらも、命をとりとめているビジネスパーソンたちの手当を始めた。

廃墟となった市街地で、全裸の男女がiPadを操作している。遠くでテロの爆撃が聞こえる中、二人はiPadの液晶画面を触り、こすり、愉楽の表情を浮かべている。二人の背中に銃を構える兵士の姿が見える。iPadを超小型特殊兵器だと誤解したようだ。

投票の結果、日本初の女性総理大臣が誕生した。彼女の次に総理大臣になったのは、片腕のない男の人だった。彼の次に総理大臣になったのは、同性愛者だとかカミングアウトした女性だった。彼女たちの治世でも大小の社会問題は続いたけれど、総じて日本はハッピーで寛容的になった。

ニュースです。砂漠に囲まれた都市で、戦闘機による誤爆がありました。誤爆テロです。次のニュースです。神様が、ついに自爆テロをしました。ただし3日後には、復活する模様です。

一昨日、神が自殺したというニュースが流れた。昨日は、小学3年生の女子が自殺したという。今日は、自爆テロで殉教し、他殺と自殺を同時にこなす人がいた。それもニュースになった。明日は、誰か大人が自殺する。目新しくもないから、それはニュースにならない。

巨大ビルのオフィス内には、白骨化した死体が溢れていた。調査前、この企業の従業員数は700名、平均年齢80歳、平均年収1000万だった。半分以上の社員が死んでいた。調査後、従業員数300名、平均年齢40歳になったが、平均年収は変わらなかった。遺族が貰っているから。

長寿大国と呼ばれているある島国で、半分以上の国民が死んでいるか、行方不明だと判明した。生きているか確認不可能なのに、年金の支払いも続いていた。生存が確認されている残り半数の国民も、心の中が死んでいるか、自分を見失った行方不明者だったから、その島国は実質上滅亡した。

ある勇敢な若者が戦闘で大活躍しました。誰もが彼を英雄だと認めました。しかし、彼の周りには、彼が倒した人間の死体だけが転がっています。人類の歴史上最強の英雄である彼は、結局世界中の人間を倒してしまいました。強過ぎた彼は、弱さを理解しませんでした。

今日ゲームを買いました。地球人類60億人が敵というゲーム。味方は自分一人だけ。道で会う人全員プレイヤーに襲いかかってくる。60億人全員殺せばエンディング。核兵器を使うのが一番手っ取り早いみたい。60億人全員を自分の味方にするという裏のエンディングもあるみたい。

勇者に殺された大魔王の息子として、魔界の再興を目指すゲームをプレイしている。一族全員勇者に皆殺しにされたから、再興はきつい（こっちも人間殺してるからお互い様だが）。魔界を復興して人間を奴隷化するのがゲームの目的だが、プレイヤーの意志で、悪魔と人間の共存も目指せる。

今日、ゾンビの主人公が人間と戦うゲームを購入した。敵は60億の世界人類。敵を殺さずゾンビ化させて、仲間にすることもできる。人類絶滅は、開発者が提示したシナリオに過ぎない。プレイヤーは自分の意志で、ゾンビと人間が平和的に共存する社会の構築を目指すこともできる。

「作者も死んだし、読者も死んだ。出版社も既に死んでいる。小説は書けないと20世紀に証明されたのに、何故かみんな小説を書いて、読み続けている」「小説を書くことが不可能なら、歴史を証言したらいい。証言の真実性を確保することは不可能だけどね」「なら虚構の小説を書こう」

「小説は何でもありの自由なテキストのはずなのに、新人賞を受賞するのは、お勉強しました的な既読感のある小説ばかり」「分類不可能、定義不可能、理解不可能な電波な作品を応募しても、落ちて当たり前。だって、最初は理解不能だから。電波だったら、デジタル発信すればいいでしょ」

「小説をビジネスとして成立させる秘訣を伝授しますよ」とサタンがつぶやく。「結構です。小説は、ビジネス化する世界に抵抗するための武器ですから」僕は力強くつぶやき返した。

「マンガもアニメも映画も動画もあるのに、何故今更時代遅れの小説なんて読んでいるの?」「小説は紙とペンと言葉だけがあれば作り出せる、低コストのパンクなメディアだからさ。お金のかかったつくりものには興味がない。ファック&デストロイの精神でしか語れないよ」「なら抗って」

本日死刑が執行されました。亡くなった死刑囚は3名です。1人目は作者、2人目は読者、3人目は小説そのものでした。被害者に謝罪し、神に祈りを捧げた後、3名は目隠しをされ、両足を縛られ、ロープをかけられて、窒息死しました。犯した罪は何かですって？ その情報は非公開です。

ファウスト博士が亡くなってから、ファウスト婦人は世界中の小説を読破することにした。20世紀までは何とか読破できていたが、最近は、新作に追いつけなくなった。毎日創造されるネットのアマチュア小説が、ファウスト婦人の脳を圧迫する。彼女はPCにはりついたまま亡くなった。

全世界の小説から最高傑作を選ぶ世界一文学賞が開催された。審査員は、過去発表された全ての小説を読む必要がある。本になった小説は審査できたが、ネットに発表された小説の審査は不毛な作業だった。審査終了まで5年かかるというが、5年の間にどれだけ新作が増えることだろう。

小説が完成しそうになると、彼は小説を破り捨てました。彼は小説を書くのをやめて、小説の断片をつぶやくことにしました。決して完成せず、全体を構成せず、むしろ全体の構成美を突き破る断片的な言葉を、彼はばらまき続けました。ごみ屑みたいな言葉をごみ屑のまま、散布する無為。

ダブリンで『ユリシーズ』全文をツイッターに打ち込んだ女性がいた。彼女はジョイスが紡いだ意識の流れをツイートでなぞったのだ。その頃ロンドンでは、ウルフ『ダロウェイ夫人』の全文をツイートした男がいた。意識の流れを写生し終わった彼は、その後世界中のツイートを写生した。

紛争の地で生き抜いている人、平和構築活動を仕事にしている人に対して、平和な日本で小説を書いている自分は負い目を感じる。せめてその人たちが自分の小説を読んだ時、歡びを感じられるような小説を書こうと毎日精進することで、負債を減らしていこう。

業務連絡です。学校で先生に殴られた人、会社で上司に殴られたり蹴られたりした人、恋人や旦那に殴られた女性、親に虐待された子どもは、その経験をフィクションにして発表して下さい。世界から暴力が減少します。告発するフィクションに暴力表現は必要ですが、実際の暴力は不要です。

小説も音楽も映画も20世紀中盤には、表現の限界に到達した。もう新しい作品など創造できないはずなのに、みんな伝統芸能として作品を再生産している。死を宣告されたジャンルを仕事にする気はない、ヌーヴォーロマンで一度臨界に達したのだから。ツイッター小説は小説とは別の力だ。

新しい技術を用いて今まで見たこともない作品を創造したとしても、そのアートもすぐ伝統芸能化、陳腐化する。決して伝統芸能にならないよう、規範から逃げ続けること。逃げ続けて、飛び続けて、こりかたまることに抵抗すること。140文字の言葉の群れが、完成から永遠に逃げ続ける。

何か新しいものが作り出されても、すぐそれはジャンルになり、権威になり、よいものと悪いものを選別するようになる。悪いと判断されたものは、除け者にされる。作り出すことに絶望するしかないなら、作り出されたものが、たくさんの愛すべき存在を排除する過程をチェックしていこう。

「ツイッターをやり始めて一番驚いたこと。文芸雑誌を読んでいる人が結構いること。周りに購読している人なんて誰もいない。いるところにはいるんだ」ジャンボ ジェット機の非常口から飛び降り自殺した彼女の遺書にそう書いてあった。僕らは彼女の試みを理解できなかったんだろう。

誰にも管理されない、誰にもおもねない。誰かの欲望の対象になろうと努力することを放棄し、何か成果物を作り上げようと努力することも放棄して、140文字の不連続な意味の断片を贈与し続ける試み。彼女の肉体は誰の所有物でもない。彼女の血と骨と内臓が、自由にネットに溢れ出す。

「人生はゲームですか？」太っちょのおばちゃんに聞いてみた。「ゲームです。勝利が目的ではなく、楽しむことが目的でもなく、自分のポテンシャルを最大限に引き出すことを目的にしたゲームです」

人類滅亡後、発掘された遺跡に書かれていた言葉「強くあるためには、自分より強い者と競争する必要はない。自分より弱い者たちを批判することなく守り、育て、自分より強くできた者こそ、真の勝利者だ」

「今いる状況から抜け出すためには、抜け出すための行動を起こすことだ。抜け出したいなと妄想しているだけでは、何も変わらない。行動だけが、状況を突き破る」そう言って神様は自爆しました。神のいない世界に残された僕たちの周囲では、神様の記憶だけが語られています。

恋人に殴られた彼女は、「話し合おうよ」と彼に呼びかけました。彼は相変わらず殴ってきます。彼女は唇から血を流しながらも「ねえ、話しあお」と呼びかけました。彼は何も言わず、彼女を殴ります。彼女は涙をこぼしながらもう一度「ねえ、言葉で話し合おうよ」と語りかけました。

「今に集中している人は計画的に人生を歩めない。過去の過ちを繰り返すし、未来が今の繰り返しになる」「今なんてどこにもない。今を今と言った瞬間、今でなくなる。過去もない。過去は忘却される。未来もない。未来は予測不能だ」「じゃあこの時間は何だ?」「計測不能の歓びだ」

何もしないことの喜び。ただぼうっと好きな音楽を聴いている喜び。目標を追求することを放棄して、ただ自分の皮膚が包まれている世界を感じる喜び。何が起きても受け入れる。何もかもを肯定する。排除せずに、組み立てもせずに、時間の流れに脳と剥き出しの生を委ねる喜び。

「人間は知識と経験を蓄えてきたのに、いまだに戦争、紛争、殺人、暴力の連鎖が続いている。暴力を終わらせる知識はたくさんあるのに、何故暴力は続くのだろう」僕はマグダラのマリアに聞いてみた。「頭では理解できても、腹が納得できないわけ。長年培った習慣を変えるのは難しいの」

「自爆テロをしようとしている少年よ。自爆テロをやめてツイートしてみようよ。ツイッターの方が世界に抵抗できるぞ」と日本語で発信してみる。このつぶやきは、自爆テロをしようとする少年、してしまった少年、その犠牲者たちに届くだろうか？

「ねえお母さん、何で僕たちは技術を発達させ、情報と知識を蓄積させて、iPadやAndroidも作ったのに、紛争や格差や不況や殺人事件がなくなるの?」「理想の実現のために頑張ってきたけどね、もう疲れたみたい。でも、まだ諦めていないよ。60億の支えがあるから」

世界中で紛争と貧困があると知識で訴えても、多くの人は振り向かない。自分の生活が安泰なら、危険は外にしかないから。「世界は問題山積みなのに何故みんな 同じ生活続けるのか」が問題じゃない。「これだけ世界に問題があるのに、知らんぷりしてていいよと、何故承認されている？」

「最近の若いのは、飲み会に行っても全員生ビールを注文しない。各自好きなものを頼みやがる」と昨日、親父たちが毒づいていた。今日新宿の駅ビルでエスカレーターに乗ったら、前にいた3人組の若者が皆スマートフォンを触り始めた。エスカレーターを降りたら、会話が始まる。自慰だ。

コンビニに行ったら、弁当売り場に動物の死体が並べられていた。スーパーにも植物と動物の死体しかない。ファストフードも高級店も全部同じ。けれどみんな平気な顔で、動植物の死体を購入して食べている。生きていくために必要な恵みなのだろう、ゴミ箱に捨てられるものもあるけれど。

「インターネットはあらゆるサービスの低価格化、無料化を世界にもたらしました。実はね、そんな高いわけなかったんですよ。利益として取られてたんですよ。安くなるからって喜んでばかりもいけないよ、皆の給料も下がっていくんだから」講演中の彼はがっつり儲けていたりする。

「今自分が批判している社会に自分も所属していると、多くの人気づかない。だから批判ばかりになる。批判するより抵抗してみよう」「君が抗ったところで何も変わらないさ」「なら私は一切の抵抗をやめて、何も作らないことにする」そう言って彼女は全裸になり、道端に寝そべった。

「先生質問です。世界にいろいろ問題があると知っているのに、知らないふりをして生きててもいいんですか？」 「逆に質問です。どうしてそう思ったのかな？」 「みんな知らんぷりしてるように見えるから」 「ごめん。先生もそう。知っているのに知らないふりはやめにしようね」

コンビニのレジにカフェラテをおいた。「はいすいません」と店員さん。お金を渡すと「はいすいません」。おつりをもらう時も、「はいすいません」。店を出る僕を見送る言葉は「はいすませ〜ん」。4回も謝られたけれど、僕は謝罪されるような責め苦を店員さんに与えていないと思う。

クリーンエネルギーが定義づけられると、クリーンではないエネルギーはダーティーエネルギーになるのだろうか？ 地球を汚すダーティーなエネルギー？ ダーティーなエネルギーしか作れない国は、ますます貧しくなる。クリーンな技術を持つ国は、ダーティーに儲けるようになる。

8月31日米軍がイラクでの戦闘任務を終了する。勝利したわけではなく、戦争が終結したわけでもない。今日もイラクではテロが続いている。戦闘任務終了という言葉の背後にかすむ幽霊たちの嘆きを感じてみよう。自爆テロと誤爆...全ての読解が誤読であるように、全ての爆撃は誤爆である。

「ペンは剣よりも強しの時代は終わった。ツイッターは自爆テロより強しの時代になるのさ」とイエスマンがつぶやいた。僕は半信半疑でリツイートしてみる。「ウィ〜」と。

「ツイッターは自爆テロより強し」というより、「ネットは誤爆テロより強し」の時代ではないだろうか。誤爆は自爆テロより現代的だ、目的から外れたケアレスミスなのだから。誤爆テロをネットが曝してあげる。「ペンは剣より強し」のウィキフリークスの現在進行形。

横尾忠則のツイッター、7万人以上に「フォローされている」けれど「フォローしている」のは0。普通は誰もが、1人くらいはフォローしたいと思うものだ。みんなやっているからといってやらない、システムがサービス利用を推奨しているからといって使わない。自分を保つ姿勢。

```
select people, MAX(love), SUM(imagine),SUM(hope) from twitter where country_code = 'JPN' group  
by people ;
```

```
insert into twitter from 'tweet_silent_majority.dmp' ; exit ;
```

```
update twitter set weapon = tweet where hash_tag match '#twnovel' ; exit ;
```